

現代学生のアパシー傾向と教室内パーソナルスペース
— 学生の「やる気」支援の手がかりとして —

森 津 誠*

**Student Tendency to Apathy and Personal Space
in the Classroom**

— A clue to improve student motivation —

Makoto Moritsu*

Abstract

This research was undertaken as part of a plan to support student.

A questionnaire on student tendency to apathy was administered to 270 university students who at the same time were asked to draw a virtual classroom showing the location of themselves, the teacher, friends and others.

Factor analysis extracted four factors: tendency to be absent, decrease in desire to study, decrease in curiosity, and lack of concentration. In the drawing test there was a positional relationship between the teacher, student and friends in the classroom. Correlation of the two tests showed that students and teachers became distant only with a tendency to absence.

Improving student motivation, the problem of distance between students and teachers and optimal personal space in the classroom were discussed.

学生支援計画の一部を実証するために次の研究を行った。スチューデントアパシー傾向に関する質問紙が270人の大学生に実施された。同時に新たな描画テストとして、私、先生、友人、他人のそれぞれの位置をクラスルームをイメージした枠内に位置づけるように教示した。因子分析の結果、次の4因子、すなわち欠席傾向、学習意欲の低下、好奇心の低下、集中力の低下が見出された。描画テストからは、先生、学生、友人間の特徴的な位置関係が見出された。二つのテスト結果の相関分析からは、先生と学生の距離は授業欠席傾向因子が高いほど離れる傾向にあった。学生の動機づけを高めるために、学生と先生との距離の問題や教室における好ましいパーソナルスペースについて論議した。

*もりつ まこと：大阪国際大学人間科学部教授〈2007.12.22受理〉

Key Words

student apathy, motivation, classroom drawing test, personal space

I はじめに

1 特別教育研究プロジェクトについて

この研究報告は、大阪国際大学の特別教育研究プロジェクト『学生の「やる気」とそのための「しかけ」の開発』の成果の一部である。プロジェクトは、心理臨床（＝現場の心理学）の各種手法を学生指導に役立てるために遂行され、以下の3点の取組み課題からなっている。

- ①学生の「動機づけ」が、日々の学生生活上の行動としてどのように現れるのかを明確にするため、i) 授業へのかかわりと個人空間との関係を投影法心理検査の手法でどのように捉えられるか、ii) 石桁（1988）を参考に、学生の「やる気」が生活サイクルの年間経過の中でどのように変化するのか、の2つのテーマを検討する。
- ②前年度研究におけるソーシャルサポートとの関係で示された「達成動機の2側面」は、どのように「生きがい」や「自己肯定感」と関連しているのかを検討する。研究の主体は既存の心理尺度（堀野、1994）を用いた分析であったが、得られた知見を「箱庭療法」によるグループエンカウターのプロセス理解のための背景仮説として用いることも検討する。
- ③学生の「やる気」の偏りは、学生相談の場における臨床知見として把握されることも多く、「ひきこもり」や「退学」に結びつく。こうした臨床事例に関して、主として文献調査により、その実態と介入技法（対策）に関する研究を進めた。具体的な介入手法としては、佐々木ら（2005）の自律訓練法を中心としたリラクセーションの適用可能性とその有効性について検討を進める。

2 本報告について

本報告は、上記の研究のうち、筆者が担当した研究の一部であり、現代学生のスチューデントアパシー傾向と教室における学生の位置関係（教員や友人との距離、教室内布置などを含むパーソナルスペース）に関する研究成果である。

一般に、授業場面で教室の後方に位置する学生は意欲に乏しい学生とみなされがちだが、こうした空間位置の取り方は学生の心理とどのように関係するのだろうか。教室における位置関係が授業に対する意欲、つまり「やる気」を反映しているとすれば、こうした心理的距離あるいは学生のパーソナルスペースを考えることから、学生の「意欲」や大学における適応性を考える手がかりを見出すことができるのではないだろうか。

学生の適応性に関して、杉本（2006）は、「居場所」や心理的距離の問題として論じているが、「居場所」が小・中学生から高校生への対人認知の発達を反映しているとした上で、学校におけるその機能の利用を提案している。本報告も、学生の「居場所」を捉える試みが、大学生の学業への動機づけを理解する手がかりとなることをめざすものである。

Ⅱ スチューデント・アパシーと現代学生

1 精神病理学研究として

大学生の授業への出席率の低下や不登校、さらには退学に至る不適応行動の背景には、なんらかのかたちでスチューデント・アパシーが関連しているといわれる。

アパシー (Apathy) とは、ギリシャ語の「pathos (passion) の欠如」に由来し、一般的には感情や興味の欠如と定義される。特に大学生に見られる特有の無気力・無関心・無感情に対し、1960年代から青年期精神病理として注目されたものである。

スチューデント・アパシーは、笠原 (2002) や下山 (1997) の紹介によれば、米国のウォルターズが、ハーバード大学保健センターの精神科医として、臨床経験をもとに一般学生の一過性無気力とは異なる独特の無気力状態を慢性的に示す一群の学生の存在を指摘したことに始まる。ウォルターズによれば、その特徴は、①情緒的動きの減退、無気力、知的無力感、肉体的虚弱、空虚感、情緒的引きこもり、社会参加の欠如、②無関心さとして、予期される敗北、屈辱、制限に対する心理的恐怖を避ける行動、③防衛として、攻撃性や競争的衝動のために他人を直接傷つけることを避ける行動、④回避として、他者をどうしようもない状況に陥れて攻撃衝動を満たす行動、⑤男らしさ形成をめぐる解決しがたい葛藤の為、青年期を遷延させている男性の青年期発達障害、⑥価値の尺度を学業達成だけに限定した結果生じたもの、⑦恐怖状況が解決されれば元に戻るものと長期間続くものがある、の6点が示されている。いずれも神経症に近い概念とし、独自の臨床症状としての可能性を示した。このような「心的動動」に注目した解釈は、臨床的には今日でも興味深い面がある。

日本でも、こうした独特の意欲減退を示す男子大学生の存在に気づいた笠原 (2002) が、大学生の無気力に関する概念の明確化を行い、わが国にスチューデント・アパシーという名称を定着させた。さらに独自の傾向として①アイデンティティの葛藤と進路の喪失がみられること、②心理状態としてアンヘドニア (快体験の希薄化) がみられること、③本業領域からの部分的退却という陰性の行動化がみられること、④病前性格として脅迫傾向、勝ち負けへの過敏性がみられること、⑤「退却性神経症」に位置すること、を提唱した。ウォルターズ概念を新たな専門用語を加えて解説し、その独自性を明確化したものである。つまり、笠原 (2002) は、アンヘドニアという特殊な心理状態が症状の基本にあることを示し、それによってスチューデント・アパシーが不安、抑うつ、離人感、焦燥、苦悩といった「自我異質的状态」とは異なる独特な「自我親和的心理状態」にあることを明確にした。

2 臨床心理学研究としての展開

1950年代後半からの高度経済成長にともなって、1960年代には大学進学率が上昇し、大量の学生が大学に入学するようになった。こうした社会状況の中で、1964年頃に国立大学教養学部の大量留年が明らかとなったのを契機として、社会問題化した。下山 (1997) によれば、留年の類型化を行う中で「みずからも明らかに捉えられないような空虚感や無感

動」を示す一群の留年生がみられることを指摘し、これを「意欲減退」型留年とした。その後、大学の学生相談や精神保健の専門家に取り上げられ、しだいにその問題の拡がりが見明らかになった。しかし、いずれも部分的特徴の指摘であり、問題の全体像は不明なままであった。この時期から、大学生の留年とともに中・高校生の不登校の増加も顕在化してきた。

1980年代には、高学歴社会が定着し、「キャンパス症状群」（笠原、2002）と呼ばれる大学生の心理的問題が社会的注目を集めた時期であり、スチューデント・アパシーは「大学大衆化時代の学生特有の無気力」として、大学関係者以外にも一般に知られるようになった。

一方、米国においては、「青年の異議申し立て」時代の影響もあって、この時期にはWaltersの示した概念として用いられることがなくなっていったが、わが国では、それまでの研究の蓄積を踏まえて独自の視点を盛り込んだ研究論文が多数出された。

状態像の分析が深められる一方で、スチューデントアパシー概念の一般的普及にともなう、その適用が本来の特異的障害を示す大学生との限定を越えて拡大する現象が生じた。この場合、スチューデント・アパシーのアパシー部分のみに注目し、特異的障害を示さなくても、無気力状態を呈する不適応であればアパシーとう名称を付す傾向が見られた。そうした中で、一般大学生のアパシー化が新たに論じられるようになった（下山、1995）。

スチューデント・アパシーの定義は各研究者によって異なっているが、鉄島（1993）によると、①学業に対する選択的退却とする定義、②精神病および頭部外傷に基づく意欲減退を厳密に除外する定義、③秀才アイデンティティの挫折などの定義に分けられるとしている。

近年では一般大学生にもこのような意欲減退を示す学生が報告されるようになり、それらの学生を対象に「アパシー傾向」として実証的な研究が行われている。

しかし、鉄島（1993）は過去の研究では、実際にアパシー傾向を捉えられているかが問題であると指摘し、自身の研究で、①「精神病における無気力とは異なること」②「心理的原因から生じること」③「主として学生の本業とされる学問に対して意欲の減退を示すこと」をアパシー傾向の定義とし、「授業からの退却」、「学業からの退却」、「学生生活からの退却」3つの下位尺度からなるアパシー傾向尺度を作成した。

また、下山（2000）は、類似の尺度を用いたデータに共分散構造分析を適用し、授業意欲、学業意欲と大学生活への意欲低下がそれぞれ異なる因果プロセスをもつことを明らかにした。意欲低下が授業や学業に対するものであるうちは一時的な不適応に過ぎないが、意欲低下が大学生生活自体にまで及んだ場合には、発達早期の問題に由来し、人格障害レベルの無気力とも重なる可能性のある深刻な事態になるとしている。

本研究におけるアパシー傾向は、鉄島（1993）が述べている「心理的原因から生じる」ものを想定し、主として学生の本業とされる学問に対しての意欲減退を示す一般大学生の心理的傾向と考える。

3 認知的実験研究

冒頭に示したように、本研究の主体である特別研究の意義は「臨床心理的」知見を日常のあるいは「社会的」場面における問題解決として用いることであった。一般の心理学はもとより、心理学の応用領域である社会心理学と臨床心理学は、いずれも現実の問題を解明するための学問として、その共同研究が期待され、既に1980年代に「不適応と臨床の社会心理学」（リアリー、1989）なるリーディングが示されていた。しかしながら、当時の方法論の限界もあり、臨床心理と社会事象とは袂を分けたままの状態であった。

最近になって「臨床社会心理学」を冠する研究紹介（坂本ら、2007；田中ら、2003）も見られるようになった。その契機は、心理学のパラダイムシフトでもある「認知」への関心の増大であり、「認知」を軸とした方法論による研究が盛んになったことがあげられる。

臨床心理系の説明理論である学習性無力感の研究が、実践的な発展を遂げるためには、帰属理論からコントロール理論を体系化した社会心理学系の理論との融合が必要であったし、その際に対人認知や状況認知といった共通概念が成立したとも言える。そして、これらの動向は、スチューデント・アパシー研究に対しても、少なからぬ影響を与えたと思われる（坂本ら、2007）。

その後のスチューデント・アパシーの米国での研究は1985年までには衰退し、日本においてもその研究状況は他の心理の分野から見ると注目されなくなってきている。しかしながら、実際には不登校や無気力を示す大学生は少なくなく、社会問題としても、積極的ニート（NEAT）を選択する若者なども増加している。研究状況としても、アパシー傾向とその要因を見出す研究は行われているが、現代におけるアパシー傾向の概念の確立までにはいたっていない。また、発達心理学から見れば、スチューデント・アパシーは青年期発達における自我同一性の拡散やモラトリアムであるとの捉え方もされている。

しかし、現代の学生に見られる無気力は、それらに加えた要因が絡んでいるのではないだろうか。行動面として、学業への意欲や出席態度は、友人との関係や、教員との関係が影響しているのではないかと思われる。ここに新たな手法、特に認知的要因を加味したアプローチが必要となってくるであろう。

従来は、アパシー傾向に関しては、その特徴をとらえるものとして、心理状態に関する質問文を用いた研究がほとんどであり、言語を介在しない、意識水準の低い面をとらえる投影法を用いた研究はほとんど行われていなかった。スチューデント・アパシーが無気力や無感情を示す病的症状であるとするならば、質問紙への回答だけではその特徴の全てを捉えられているかどうかは疑問であろう。

本研究では、アパシー傾向をとらえる質問文を適用すると同時に、対人認知の側面をとらえる方法として投影法的手法を適用した。

臨床心理技法としては、特定空間内に家族等の人物を置かせ、それらのシンボルとしての配置から対人関係を見出す技法が示されている（築地、2007）。また、福井ら（2006）は、箱庭療法において、フィギュア配置に投影される愛着スタイルに言及している。

これらの研究を参考に、ここでは新たに開発した「教室人間配置図」を用いた。これは、「教室」を模した枠内に「私」、「先生」、「親しい友人」、「あまり親しくない友人」を配置

させることで、教室における心的位置関係あるいはパーソナルスペースを測定することを意図した方法である。

本研究では、この配置図における人物プロットが、質問紙によって捉えられるアパシー傾向とどのような関係にあるのかを探索的に見出すことを目的としている。

Ⅲ 調査方法

1 調査対象

大阪国際大学の学生270名（男性：153名 女性：117名）を対象とした。授業時間を利用して協力を求めたが、セミナーなど小規模クラスを中心に実施した。

2 調査項目について

2-1 質問紙の作成

鉄島（1993）の作成したアパシー傾向尺度を用いた。この尺度は31項目からなり、第1因子「授業からの退却」（12項目）、第2因子「学業からの退却」（12項目）、第3因子「学生生活からの退却」（7項目）からなる。質問項目の多くは、学校生活に関する質問であり、スチューデントアパシー傾向をとらえるものとして多用されている。

回答方法は1「全くあてはまらない」、2「あてはまらない」、3「あまりあてはまらない」、4「ややあてはまる」、5「ややあてはまる」、6「非常によくあてはまる」の6件法である。

2-2 教室人間配置図の作成

図式的投影法として、オリジナルに作成した「教室人間配置図」を用いた。これはA4用紙の中心に12×14cmの四角形を描き、下方に出口の書かれた枠内に、「私」、「先生」、「親しい友人」、「あまり親しくない友人」をそれぞれ書き入れてもらうというものである。

教示として、「ある部屋で、授業が行われようとしています。この図を教室だとイメージして、「私」、「先生」、「親しい友人」、「あまり親しくない友人」を下の図に配置してください。」とした。

架空の授業、架空の教室に自分を含めたその他の人間をイメージさせ、配置させることにより、質問紙の内容と対応させて、授業に対する積極性や大学内での人間関係をとらえることが可能と思われる。

Ⅳ 結果と考察

1 アパシー傾向項目の分析

今回得られた結果について、質問項目31項目を対象として、主因子法による因子分析を行った。しかし、鉄島（1992）が作成したような明確な3因子構造が得られなかった。そこで、因子負荷の少ない項目9項目を除いて、主因子解に対してプロマックス回転を行っ

た結果、4因子構造が得られた。寄与率は65%である。各因子の信頼性は、第1因子 $\alpha = .899$ 、第2因子 $\alpha = .785$ 、第3因子 $\alpha = .712$ 、第4因子 $\alpha = .760$ であった。

表1 アパシー傾向項目の因子分析結果

項目内容	授業欠席 傾向	勉学意欲 低下	好奇心の 低下	集中関心 欠如
02.出席重視される授業でさえも休みがちである	.878	-.108	.083	.103
01.必修科目などの重要な授業にも、つい出る気がしなくなつて欠席してしまうことがある	.829	-.067	.035	.040
03.なんとなく授業をサボることがある	.812	.117	.048	-.078
05.生活リズムが一定しないために、午前中の授業は欠席しがちである	.809	-.002	-.071	.106
04.大学内にいても、つい授業にでるのが面倒くさくなつて欠席してしまうことがある	.714	.046	.050	-.021
06.朝寝坊などで授業に遅れることが多い	.709	.207	-.159	-.105
08R.授業は何よりもまず第一に優先している*	.560	-.072	.277	-.168
14.授業は積極的に参加するというよりも、いつもただ座っているだけという感じだ	.076	.693	-.071	.003
15.勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう	-.112	.613	.133	.261
20.「早く授業が終わればいい」としばしば思う	-.036	.559	.024	-.071
17.出来栄は納得しなくても、レポートは提出さえすればよい	.101	.543	-.071	.154
09.大学からの連絡事項などについてはほとんど関心がなく、人から教えられることが多い	.271	.487	-.178	.012
21R.時間を忘れて勉強することがある*	-.178	.182	.647	-.079
16R.勉強で疑問に思うときはすぐに調べる*	-.019	.084	.636	-.056
23R.卒業に必要な単位を取得していても、自分の興味関心にあった授業はとるようにしている*	.127	-.135	.526	.103
24R.好きな教科(科目)は一生懸命に勉強する	.096	-.191	.489	.209
31R.大学での時間は私の生活の中で有意義である*	.112	-.113	.487	.045
13R.教師に言われなくても自分から進んで勉強する*	.050	.367	.455	-.146
28.大学での勉強もアルバイト活動などもあまりやる気が起こらない	-.028	.013	.037	.642
27.自分の興味のある事柄さえ、あまりエネルギーをそそぐ気がしない	.034	-.015	-.101	.617
29.物事に集中するのは苦手だ	-.042	.100	.142	.591
25.一つの課題に打ち込むことができない	-.023	.061	.054	.476
因子間相関	I	II	III	IV
I	-	.37	.09	.27
II		-	.31	.34
III			-	.12

表1に示したように、各因子の項目から見て、第1因子は「授業欠席傾向」、第2因子は「勉強意欲低下」第3因子は「好奇心低下」、第4因子に「集中関心の欠如」と命名した。鉄島（1992）の結果との相違は、「学生生活からの退却」が「好奇心低下」と「集中関心の低下」の2因子として示されたことである。「授業欠席」と「学業意欲の低下」の因子に変化はない。

各因子について、対象学生の属性によって相違があるかどうかを検討した。その結果、図1に示すように、因子得点における比較では、見かけ上は、女子のほうがアパシー傾向が強いようだが、各因子とも統計的有意性はなかった。また学年による各因子の変化に関しても図2に示したように、学年をおって変化する傾向は見られたが、統計的に有意な変化ではなかった。

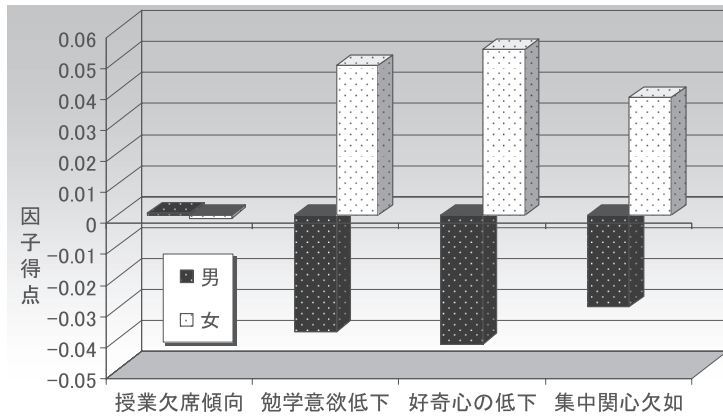


図1 アパシー傾向因子ごとの男女差

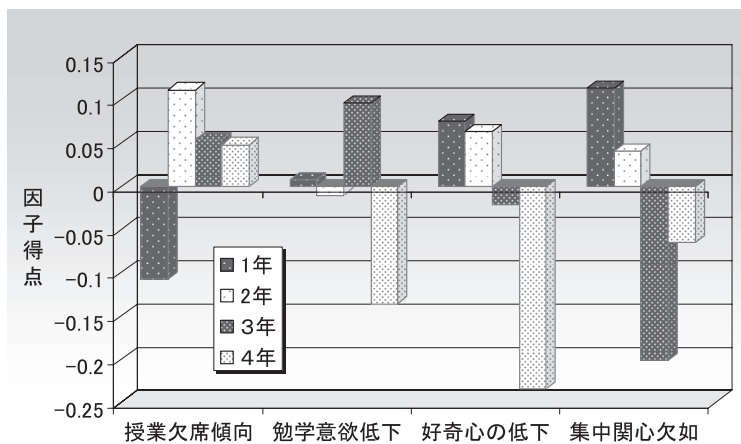


図2 アパシー傾向因子ごとの学年差

2 人物配置位置と距離の分析

本人及び配置した人物、先生、友人、あまり親しくない友人（以下、他人とする）のそれぞれの座標値を教室左下を原点として取りだした。それぞれの絶対位置とともに、各人物間の距離を座標値をもとに換算した。

図3に示したように、「先生」の位置は概ね特定の位置に集中しているが、図4に示したように、私の位置はばらついている。これは、友人あるいは他人についても同様であった。但し、「私」と「友人」の位置に関しては左右位置、前後位置ともに強く関連していた（ $r=.981$, $r=.955$ $p<.001$ ）。これは、「私」と「友人」とは常に近い位置関係にあることを示している。一方、人物間の距離を見ると、「私」との距離（mm）は、「先生」とは78.7（SD=30.3）、「友人」とは21.5（SD=21.5）、他人とは71.1（SD=35.5）であった。「友人」とは明らかに近いが、「先生」は他人つまり親しくない友人と同程度に距離をおいていることになる。

「私」との距離について、男女差と学年差は、図5、図6に示したが、統計的には「他人」との距離において4年生のみが有意に離れていた（ $F_{3,253}=2.77$ $p<.05$ ）。

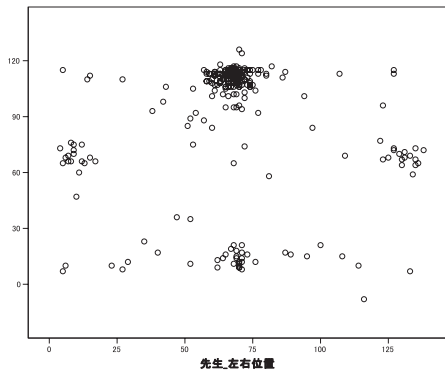


図3 先生の位置（散布図）

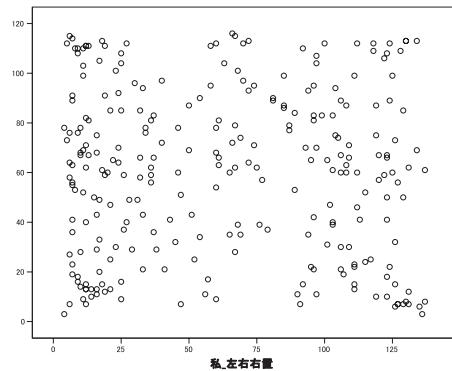


図4 私の位置（散布図）

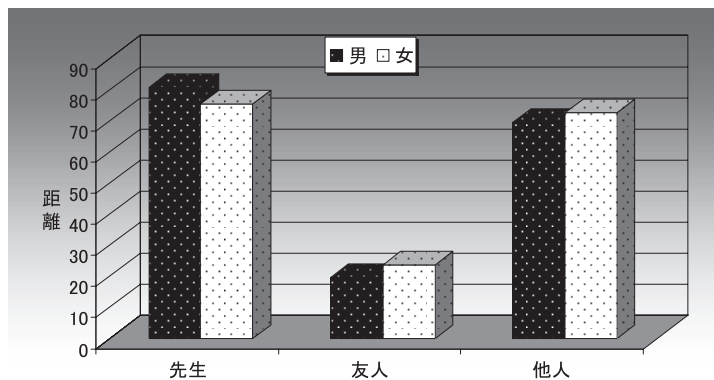


図5 私との距離の男女差

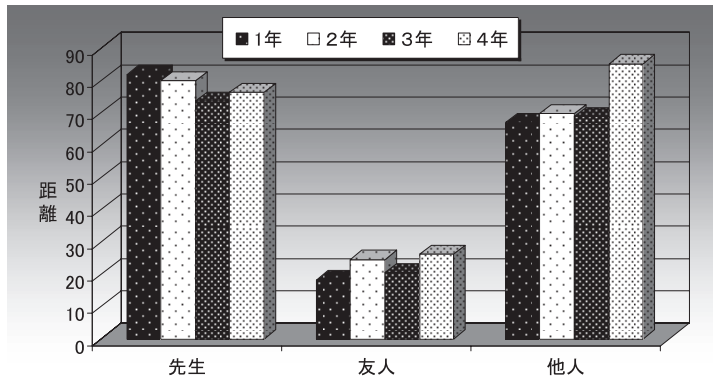


図6 私との距離の学年差

3 アパシー傾向と教室内位置

アパシー傾向の各因子と各人物との関係を表2に示した。「私」「先生」「友人」「他人」の座標位置と各因子得点の相関行列によれば、授業欠席傾向の因子に関してのみ、「私」の位置および「友人」の位置が関係していた。これは、授業欠席傾向が高いほど教室の後方に位置していることを示す。

次に「私」との距離に関して、4因子との関係をみたところ、有意な関係が見られたのは授業欠席傾向と先生との距離 ($r=.22$ $p<.01$)、勉強意欲低下と先生との距離 ($r=.15$ $p<.05$)であった。つまり、欠席傾向が高いほど、また勉強意欲低下が強まると先生との距離が増すことを示している。他の因子と各人物との距離においては差が見られなかった(表3)。

表2 アパシー傾向と教室内位置の相関

	授業欠席傾向	勉強意欲低下	好奇心の低下	集中関心欠如
私_左右位置	.143	.021	-.029	-.006
私_前後位置	-.193	-.033	-.034	.018
先生_左右位置	-.034	-.010	.021	-.023
先生_前後位置	.057	-.084	-.046	-.016
友人_左右位置	.114	.043	-.023	.021
友人_前後位置	-.233	-.096	-.086	-.079
他人_左右位置	-.136	-.085	.006	-.096
他人_前後位置	-.020	.000	.034	.099

表3 アパシー傾向と私との距離

	先生との距離	友人との距離	他人との距離
授業欠席傾向勉	.22**	-.01	.01
学意欲低下	.15*	.05	.06
好奇心の低下	.07	.02	.01
集中関心欠如	.03	.11	.07

** $p<.01$

* $p<.05$

4 全体の構造として

これまでに検討した要因間の関係を全体構造としてとらえるために、共分散構造分析によるパス解析を行った。初期モデルとして、すべての変数間に想定しうるパスを前提にしたが、人物間の距離との関係では、多くのパス係数が有意ではなかった。

結果として、図7に示したようなパス図が得られた。このモデルでは、 χ^2 乗値も低く、他のモデル適合指標から見ても妥当なモデルと考えられる。

スチューデントアパシーの構造としても、パス係数から見ると、「勉強意欲の低下」が中心的な役割になっていることがわかる。授業欠席傾向、好奇心の低下、集中関心の欠如が協同的にアパシーを形成していることも再確認された。

なかでも、授業欠席傾向が「先生」との距離を増大させていることが示され、友人や親しくない友人との関連も独立しているようである。

教室内に人物位置を簡便に描画させる方法によって、特定の人物、つまり「先生」の位置が同定され、「私」との距離関係が見出せた。また「友人」との距離との相対的比較も可能であった。

しかし、今回の方法では、教室の前方位置を明確に示さなかったため、「先生」の位置の解釈が難しくなるケースもあった。描画条件をいかにに明示するかが今後の課題となろう。

同様の手法として、投影的手法と同様の手法を示したものとして、先に示した家族関係認知のためのシンボル配置技法がある（築地、2007）。また、福井ら（2006）は箱庭療法（河合、1965）におけるフィギュアの配置特性と愛着スタイルとの関係を分析している。いずれも、非言語的に対人関係および距離をとらえようとしているものであり、今後これらの研究に示された概念によって質問紙法では捉えられない面を見出す手法として発展すると思われる。

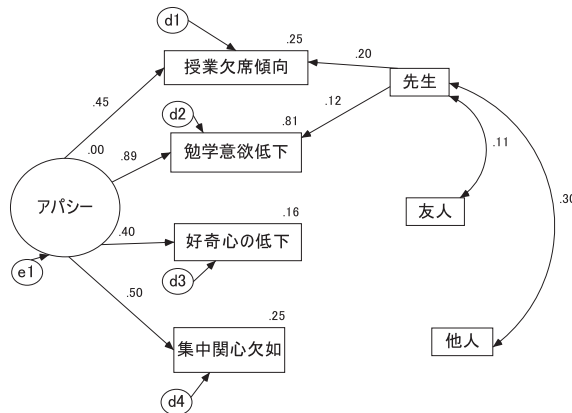


図7 関係する要因のパス図（有意なパスのみ）

Ⅵ まとめ

本研究では、学生の「やる気」を高めるための手がかりを得るため、「スチューデント・アパシー傾向=無気力」と学生自身や友人らの「教室内位置」との関係を見出そうとした。

アパシー傾向に関する質問紙調査にあわせて、新たに開発した人間配置図を用いて両者の関連性について検討した。

その結果、アパシー傾向の高低によって、人間配置図においては、私・友人の配置位置に差があることが示唆された。また、人間配置図における「私」との距離がアパシー傾向のうちの「授業欠席傾向」と結びついていた。

人間配置図からアパシー傾向の特徴をいくつか捉えることが出来たが、人間配置図はオリジナルな手法であり、本研究でもいくつかの問題が見出された。この方法を用いて、更に研究を進めることが今後の課題である。

しかし、これの心的距離が示されたことを考えると、「先生」と学生との距離を近づけることが、アパシー傾向や大学への適応性を改善することに役立つことをも示している。

配置図に具体的に示された各人物の空間位置や人物間の関係をパーソナルスペースとして考察するためには、描画条件を明確化したり、人物を特定化するなど、今後の改善が必要と思われる。人物間の距離や布置を心理的象徴としてとらえるためには、他の対人関係尺度をとの関連性を検討する必要もあろう。

注記：本研究は、大阪国際大学平成18年度教育研究助成課題「心理臨床の視点による「やる気」の理解とその「しかけ」の開発に関する研究Ⅱ」の一部として実施された。この課題に関するプロジェクトメンバーは、森津誠、青野明子、佐瀬竜一である。

また、本研究のアイデアと研究遂行の多くは、現在、花園大学大学院修士課程在学中の岡田信吾君（平成17年度卒）の卒業研究に負っている。記して感謝の意としたい。

参考文献

- リアリー、M.R.他 安藤清志他（訳）、不適応と臨床の社会心理学、誠信書房、1989
下山晴彦（編）、臨床心理学研究の技法、福村出版、2000
下山晴彦、スチューデント・アパシー研究の展望、教育心理学研究、44、350-365、1996
下山晴彦、男子大学生の無気力の研究、教育心理学研究、43、145-155、1995
下山晴彦、臨床心理学研究の理論と実際 スチューデント・アパシー研究を例として、東京大学出版会、1997
河合隼雄、箱庭療法入門、誠信書房、1965
笠原嘉、アパシー・シンドローム、岩波現代文庫、2003
佐々木雄二・佐瀬竜一、自律訓練法（臨床心身医学入門テキスト）三和書店、2005
坂本真士他（編）、臨床社会心理学、東京大学出版会、2007
杉本希映、「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化、教育心研究、2006
石術正士、「やる気」の管理学、講談社、1988
築地典純、シンボル配置技法による家族関係認知の研究、風間書房、2007

現代学生のアバシー傾向と教室内パーソナルスペース

- 鉄島清毅、大学生のアバシー傾向に関する研究 - 関連する要因の検討 -、教育心理学研究、41、200-208、1992
- 田中共子他（編）、臨床社会心理学-その実践的展開をめぐって-、ナカニシヤ出版、2003
- 福井義一・森津誠、箱庭表現に投影される愛着スタイルに関する研究、日本心理臨床学会第25回大会発表論文集、2006
- 堀野緑、達成動機の心理学的考察、風間書房、1994